

## 『精神現象学』における觀察的理性について

船 盛 茂

### (一)

『精神現象学』の理性の段階は、「自らが全実在であるという意識の確信」<sup>註1</sup>の段階である。しかしそれがいまだ単なる確信にすぎないが故に、現実には自己に外的な存在を認めざるを得ない分裂の意識である。ヘーゲルはこのような分裂の自覚のもとに、自己の確信を実現せんとして、自らに外的な存在すなわち自然へと向い、その内に自己の支配をみてとろうとする理性を觀察的理性 (beobachtende Vernunft) と呼んでいる。觀察的理性の運動は簡単にいえば、感覺的に現存する物 (das daseiende Ding) としての物の本質を把えんとする「思い込み」(Meinung) から出<sup>註2</sup>発した意識が、觀察という運動の結果、自覚的な存在としての自己が外的に現存する物に他ならない、ヘーゲルの言葉を借りれば「精神の存在が骨である」(das Sein des Geistes ist ein Knoten) と<sup>註3</sup>いう無限判断 (das unendliche Urteil) へと到達することにより、自己を止揚せざる<sup>註4</sup>をえない理性の経験の過程である。

ところでヘーゲルは觀察的理性についての叙述の終りで、この無限判断が実は自己意識の段階を経てきた理性がそこにおいてはいまだ単なる

確信として無自覚に抱いていたにすぎなかったものを、自己の経験をを通じて自覚的に持つにいたったのに他ならないと指摘している。自己意識と觀察的理性との関係についてのヘーゲルのこのような見解から、我々は觀察的理性についてヘーゲルがどのような意味、役割を与えていたか推察できるであろう。

さて一般にヘーゲルの『精神現象学』の研究において、多くの論者は、この書の成立の事情について論述する場合や、この書の意識の経験の展開において断層があるのではないかといった問題についての研究において、理性そのうちでもとりわけ觀察的理性の終りから、次の「理性的自己意識の自己自身による実現」の始めの部分を取り上げて論究するのが常である。しかしその場合でも觀察的理性の段階の詳細な分析、更にはその意味・役割について積極的に取り上げて論じることがほとんどなされていない。例えばルカーチにしても、青年時代のヘーゲルの哲学の生成過程を論じた『若きヘーゲル』において、觀察的理性の段階を省略し、自己意識の段階から直接次の「理性的自己意識の自己自身による実現」の章へと移っている。<sup>註5</sup>ルカーチ以外の研究者の場合でも大体似

た取り扱いがなされている。『精神現象学』の重要性が認められ、種々の観点からそれに対しての研究がなされながらも、その内の観察的理性の章だけはこれまでほとんど問題とされることがなかったというのが実情である。

観察的理性の段階において扱われているのは、「自己が全実在である」と確信している理性にとり、自己の外に存在する物すなわち自然の観察であり、これは当時の自然科学あるいは自然哲学に対してのヘーゲルの見解の表現である。観察的理性とはヘーゲルにとり近代自然科学の精神であり、そのような意味においてヘーゲルの近代自然科学論が展開されているといっても過言ではなからう。ところで今日の自然科学の興隆と、それにより生じている諸問題を考えるとき、それを基本的にはどのように理解し、更に対処するかという問題が、現代の我々にとり避けることのできない問題として提出されている。我々がそのような問題について考えていく場合、ヘーゲルの一種の近代自然科学論としての観察的理性の段階について考えてみるということは、必ずしも当を得ていないとはいえないであらう。我々はこの小論においてそのような点を踏まえつつ、まず観察的理性の『精神現象学』においてもつ意味と役割、次いでそれがそれ自体でもつ意味と役割について論じることにはしたい。

## (二)

ヘーゲルは観察的理性の帰結において、意識の辿り着いた結果が二重

の意味を持っていることを指摘している。すなわちその一つはそれが先行せる自己意識の運動の結果を補う限りににおいて、真なる意味を持つということである。<sup>註6</sup>ヘーゲル自身のこの指摘のうちに、われわれのこれらの論究の一つの重要な指標を求めることができると思う。しかしその場合、自己意識の運動の帰結を補うとはどのようなことを意味し、更にはまたその限りににおいて観察的理性の運動が真なる意味をもつのはなぜであらうか。このことの理解のためにまず、自己意識の運動の結果について簡単にみてみることにする。

『精神現象学』の最初の段階である意識の運動においては、意識は真理が自己の外の外的な何物かのうちにあると確信し、<sup>註7</sup>それを把握しようとして種々の経験がなされたわけであるが、その結果として感覚的意識は、実は自らが自然のうちに見出した法則が悟性の法則に他ならないということ、換言すれば自然の法則が、実は意識自らが自然のうちへと持ち込んだ意識自らの法則に他ならないという、自らのこれまでの確信と反する結論へと達した。それ故意識は今や外的な何物かのうちに真理が存在するという思い込みから脱し、真理は自己以外の何物のうちにも存しないということを確認するようになる。意識は自体的 (an sich) に存すると思っていた他者が、実は「他者にとってのもの」(für ein anderes)<sup>註8</sup>すなわち意識にとつてのものであることを経験することにより、自己の外でなく、自己のうちに真理を求めようになる。このように真理が自己以外の何物でもないということを確認した意識が自己意識であるが、それは自己自身へと向う探求において、結局最初の自己の確信を廃棄せ

ざるを得ず、「自らが全自在である」ということを、従って自己と存在との統一を確信するようになった。そしてこの確信こそが、自己意識が自らの運動の結果として得たものであった。

しかしこの結果を内容という点から考えてみるならば、それはもはや意識に属すべきものではなく、それを超えたものであり、理性の内容に属すべきものであった。この点にこそ自己意識がその自らの辿り着いた結果において、理性へと移行しなければならぬ必然性が存したわけである。そこで我々が次に理性として登場してきた意識の確信を検討してみると、内容的にみてそこに含まれている真理は「確実性と有、あるいは対象性との一致、というよりはむしろ統一<sup>註9</sup>」ということである。すなわち「理性は………対象の知識と自己の知識との最高の統一である。理性は、理性の諸規定が我々自身の思想であると共に、また对象的でもあり、すなわち物の本質の規定でもあるという確実性<sup>註10</sup>」なのである。理性にとっては本来自らの知識の内容は、決して自らに対し外から与えられたものではなく、まさに自己により貫徹されたもの、自我のものとして「同化され」(aneignen)<sup>註11</sup>、それ故自己により生産されたものなのである。しかし勿論今指摘した理性の真理性は、当の現出して来たばかりの理性にはわかっていない。それが自覚されているのは、ヘーゲルの言葉を借りるならば「われわれにとって」(für uns)<sup>註12</sup>のみである。確かに理性の確信のうちには、前述の如くすでに知と対象とについての最高の統一、換言すれば知の最高の段階である絶対知の最初の現われを認めることができるわけであるが、しかしまだここにおいてはそのような知と

対象との最高の統一が、意識の単なる「主観的確信」(subjektive Gewissheit)のうちにおいてしか現われていないのであり、しかも当の意識は自己の確信の指し示している真理の地平を自覚していない。そのような意味において意識はまだ単に即的に理性であるにすぎない。

このような意識の経験の過程を踏まえた上で、前に指摘した「この確信を補う限りにおいて」ということについて改めて考えてみたい。この確信をもった理性が観察の運動へと駆りたてられる理由については、他の論文ですでに詳論したのでここでは省略したい<sup>註13</sup>。確かに意識、自己意識をして理性というこれまでの意識の「発展全体に共通する性格として、個体的意識はその最高の段階(理性)でも、また最底の段階(意識―感覚的確信)でもいたるところで自己に疎遠なできあがった外界を自己の前に見出す。」<sup>註14</sup>と指摘することは可能である。しかしそれと同時に他方では理性の段階においては、そういった自己に疎遠な外的なものとの自己との統一ということを確認するにいたっている。従って理性の段階においては個性と一般性との分裂が自覚されているのであり、その分裂を意識は自然すなわち無機物、有機体などの観察により克服しようとするわけである。ところで現出してきた理性が自己の前に見出し、認めざるをえないそのような外的な疎遠なものとはいかなるものであろうか。それはすでに前掲の論文においてもふれたように、自己意識にほかならなかった。すなわち自我と存在の統一体を、外的な物として見い出しているのである。この存在と存在に属するものとの直接的統一は範疇と呼ばれたが、これを理性としての意識は対象とするのであり、しかもこの

理性としての意識がとる形態である観察的理性は、範疇を存在という形式において対象とする意識の形態であった。それ故観察という形態をとる理性が、主観と客観との分裂を克服しようとするとき、実際は自我と存在の統一体である範疇を自己と疎遠な外的な存在と思いつ込んでいるわけであり、それとの間の分裂を克服しようとしているのである。

そのような意図をもつ観察的理性の運動がその結果として「自己の存在が物である」<sup>註15</sup>すなわち自覚的存在である自己が、感覚的に現存するものであるという判断にいたる詳細については、すでに前掲論文で述べたわけであるが、この判断からして意識は結局自己の自覚的存在を、感覚的に現存する物という形態においてもつことになるのであり、それ故そこにおいては意識にとっては自覚存在が存在、すなわち即自存在であるとも言えるであろう。すなわち意識は観察の結果自覚存在としての自己と、即自存在としての物という二つの相反するものが、同一であると直接的に主張する無限判断を得ることになったのである。<sup>註16</sup>ここにおいて観察的理性は自らがこれまで無意識のうちに確信していたことを、自覚的に命題として表わすことになったのであり、この点にこそこれまで観察的理性にとって「存在」として直接的に存した範疇が、「媒介もしくは否定へと移行する」<sup>註17</sup>換言すれば「存在に属するもの」、あるいは自覚存在へと移行する必然性が存するのである。理性としての意識がこれまで自己の本質を把握しようとして向っていた「存在」から、自覚存在のうちに自らの本質を見出し出そうとして行うこの移行については、ヘーゲル自身ですでに骨相学の結論を先取するようにして人相学の終りのところで、「人

間の真の本質はむしろその実行 (Tat) である。実行において個性は現実的である」<sup>註18</sup>という表現でもって暗示していたところである。人間の真の本質 (das wahre Sein des Menschen) を「存在」においてではなく、その行為的側面でもって把握しようとすることへのこの移行は、無限判断がその性質において、自己自らを廃棄する運動であることによる。理性は観察の結果として無限判断へといたることにより、もはやその観察の立場を廃棄せざるを得ず、行為を通して自己の実現をはかろうとする行為的理性となる。

だからしてこの観察的理性の運動は、個性性と一般性との同一性を始めて確信するようになった意識が、その確信にもかかわらず、他方ではそれに矛盾する外的で疎遠な存在をさしあたっては認めざるを得ないが故に、それを単なる直接的同一性の状態のままにとどめておくのではなく、その確信の内容を概念的に把握するという状態にまで高めようとして、これ以後理性、精神、宗教そして絶対知という意識の長い道程を経なければならぬその第一歩として、見過すことのできない重要な役割を担っていると見えよう。そういった意味では理性以前における意識と自己意識の段階における意識の展開の過程は、ヘーゲルが彼以前の諸思想を発展的に位置づけ、それによりすでに確立した彼自らの学的方法でもって透見 (Einsicht)<sup>註19</sup>し、叙述していったものだと考えることができるであろう。これに対し理性以後の意識の展開の過程は、確かにその素材に関してはこれまでと同様過去の歴史的な素材でもって構成されているが、その展開の過程は同時にヘーゲル自身の自己と物との同

一性を概念的に把握するにいたる、彼自らの苦悩にみちた思想形成の過程そのものである。チュービンゲンでの学生時代からベルン、フランクフルトでの家庭教師時代、そしてイエーナへ移ってからの哲学講師の時代を通じての経験、すなわち古代ギリシャの倫理的共同体、民族精神、イエスの愛、生命そしてシェリング哲学を超え、最後にキリスト教を絶対宗教としてその真理性をうけ入れることにより、絶対的精神の存在を認めるにいたる青年時代の思想遍歴そのものである。そして観察的理性こそがまさしくその第一歩なのである。それは彼が観察的理性の始めにおいて言っている「前には物において多くのことを知覚し経験するということが、(何とはわからないままに)意識に生起し (geschehen) てくるだけであったが、いまでは意識は観察と経験を自分で行うようになった。」<sup>註20</sup>ということからも充分窺い知ることができるといえる。

そこで次に観察的理性の確信と、そののなす経験の内容との関係は一体どのようなになっているのかについて考えてみることにする。ルカーチはその著書『若きヘーゲル』の中で、『精神現象学』における発展段階を大きくⅠ主観的精神、Ⅱ客観的精神、Ⅲ絶対的精神の三段階に区分し、理性が主観的精神の最後に属するものとしている。こうしたルカーチの精神の発展段階の分類を考慮しながら、船山氏はヘーゲルの一八〇五、六年の『イエーナ実在哲学』を引き合いに出しつつ、観察的理性においてすでに絶対知が扱われていると言い、更にそれにつけ加えて「われわれはここ(『イエーナ実在哲学』中でヘーゲルの述べている観察的理性)にも『精神現象学』における絶対知がすでに現われているが、しかしこ

ここでは絶対知が精神Ⅰ客観的精神Ⅱ宗教と媒介されず、従って理性として主観的精神の範囲内でとらえられ、真の絶対的精神としてとらえられていないことを見い出すであろう。」<sup>註21</sup>と指摘されている。勿論船山氏によりここで直接問題とされているのは、ヘーゲルの体系への思想の形成過程であり、そのような観点からみた場合『イエーナ実在哲学』の観察的理性において、たとえ主観的精神の段階に属すべきものではあっても、ともかくすでにその時期に絶対知についての考えが、ヘーゲルに芽生えていたのだということであろう。しかしこのことは今の我々の論点に照らしてみただけの場合、何も『イエーナ実在哲学』の理性にのみ妥当することではなく、『精神現象学』についても同様のことが指摘できよう。それはただ単に『精神現象学』における意識の諸形態の展開の過程が、同時に絶対者の顕現の過程であるからしてたとえどのような低次の自然的意識であろうとも、その自覚の程度に応じてそこにはすでに絶対者が現われているのであるといった逆説的意味においてはではなく、登場して来た理性としての意識がもつ「自己と存在との同一性」という確信の内容に即していえることである。

しかしここで意識の確信している自己と存在の同一性は、まだ単なる意識の確信にとどまっており、媒介を経た同一性ではなく、直接的同一性であり、そういった意味ではいまだ単なる主観的なものにすぎない。しかし観察的理性において今指摘した如くたとえ裸のまま、従って無媒介の形で主観的精神の範囲内においてであるにしても、ともかくも絶対知がすでに現われているといえるであろう。<sup>註22</sup>だからしてたとえこの実際

の意図は異つていようと、観察的理性が自らの経験の結果として、自らがこれまで単に無自覚のうちに確信していたことを命題でもって表わした「自己の存在は骨である」という無限判断について、「この判断は、直接ひびく通りに受け取れば、精神を欠いている。あるいは精神なきものである。だがこの判断はその概念から言えば実際には最も精神豊かなものである。」<sup>註23</sup>とヘーゲルが指摘するとき、この彼の言葉がこれまでこの小論において論究してきたことを裏付けてくれるであろう。

### (三)

ところでこの小論の始めの部分で簡単にふれたが、理性特に観察的理性から次の理性的自己意識の自己自身による実現の段階への移行のところではば問題となるのが、そこに断層があるのではないかということである。勿論この問題の真の解決のためには単に『精神現象学』のみでなく、この書がヘーゲル哲学体系の内に占める位置、役割更にはこのことと関連して、『精神現象学』と『論理学』との関係などについての研究、とりわけこの書の執筆がナポレオンのイェーナ侵攻という特異な状況の下でなされただけに、その成立の過程についての研究が必要なわけである。そのような意味からすれば、ここではいまだそれについての準備は充分ではないが、この点についてこれまで述べたことと関連する限りにおいて簡単にふれておくことにしたい。

ヘーリングはヘーゲル自身が『精神現象学』の意図を途中で変更したことを確認した上で、ヘーゲルが観察的理性における論理的思惟の法則

の役割を忘れているし、また次の心理学的な意識の叙述に關しても「：そしてただちにこういった経験的心理学の事実や、またその法則を全個体性のより高い段階へともたらそうと務め、止揚することを意図している」<sup>註24</sup>と指摘している。このような点を顧慮するとき、ヘーリングが観察的理性の(b)論理学的法則と心理学的法則についての叙述に關し、一種の論理的不整合、換言すれば断層(Kluft)を認めているのは明らかである。しかしヘーリングのそのような見解に対し例えば檉山氏は「ヘーゲル精神現象学の研究」において、執筆途中での意図の変更とそれに伴う断層は認めながらも、しかしそれはすでに内容的にはヘーゲル自身により埋められているというホフマイスター、ラッソンそしてルカーチの説を引き合いに出して、氏自らもそれと同じ立場に立っている<sup>註25</sup>。ただこの場合一言付言しておかねばならないのは、ルカーチは理性の段階において主観的精神から次の精神すなわち客観的精神への移行の必然性については強調していても、断層があったことについては明言は避け<sup>註26</sup>ているということである。

さて主観的精神の終りの観察的理性とその確信の内容、更に絶対知の内容や両者の関係についてのこれまでの論述をもとに考えるとき、ここには意識が絶対的精神としての絶対知へと高まっていくために欠かすことのできない役割が存し、従って『精神現象学』全体の内の観察的理性詳述の論理的必然性が存すると思われる。それ故檉山氏などと同じく、たとえその執筆の途中でその意図の変更がなされたとしても、その際できたかも知れない断層は充分埋められ、もはや断層とも言えない程

になっていると言えよう。

#### (四)

さてこれまで我々は観察的理性を『精神現象学』における観察的理性という観点から、その意味と役割について述べてきたわけであるが、次に『精神現象学』を離れて一般的にはそれがどのような意味と役割を有しているかを、特に近代自然科学との関係から考えることにしたい。

観察的理性の運動の叙述の内容は、常に物や自然との意識の係わりにおいて展開されているからして、ここにおいてヘーゲルの自然観そのもの・自然哲学が展開されていると見なされるかもしれない。勿論そういった見方が全くできないわけではない。しかしヘーゲルが本来ここで意図したことは、すでに明らかな如く「自己と疎遠な外的な物」の存在を認めながらも、なおかつそのうちに自己の支配を見て取ることにより、「自己が全実在である」ことを主張しようとする意識の運動の叙述であり、感覚的確信から絶対知への高まりの道程において意識が不可避的に経験しなければならぬ意識自身の一形態を示すことに他ならなかった。従って観察的理性特にその中の「自然の観察」においては、フランシス・ベーコンなどに始まる近代自然科学がその基盤としているものが示されるわけであるが、しかしそれが意識の一形態として示されることにより、ただちに否定されてもいく。すなわち近代自然科学的意識の思い込み、限界が明確にされていくのである。

それでは近代自然科学の思い込み、限界をヘーゲルはどのような点に

みたのであろうか。それは近代自然科学がその考察の対象としている物そのものが、本来の物そのものではなく、自然科学的意識により単に思い込まれた物そのものでしかないということに尽るであろう。自然科学は自然そのもの、もしくは外的な客観的存在の把握をその目的とするわけであるが、それが考えているところの外的な客観的存在が実は単にその意識にとつての存在、「思い込まれたもの」(Mainen)<sup>註27</sup>にしかすぎないからして、実際は自らにとつての物を対象としておりながら、外的な客観的存在そのものをその考察の対象としているという思い込みの内にとるとヘーゲルは言うのである。このことは感覚的なものは一般者の中に取り入れられるだけでそれ自らが一般者となったのではない、と自然物の観察へと向つた意識に関してのヘーゲルの指摘<sup>註28</sup>、更に実験の結果獲得される「純粹法則」(das reine Gesetz)<sup>註29</sup>についての彼の叙述、すなわち純粹法則が概念として感覚的存在の中にありながら、これから独立に、これに拘束されることなく動くものであるにもかかわらず、それを意識が「特殊な対象」(eine besondere Art von Gegenstand)<sup>註30</sup> 換言すれば物質としてしか理解しないこと、更に以後の自然の観察がそういった物質を地盤にしてなされていることから充分窺い知ることができよう。そして自然の観察の最後において「地」(Erde)<sup>註31</sup> という象徴的表現でもって、そういった意識が獲得したもののみでなく、それのよつてたつ地盤までも含めて限界が示されることになったのである。物そのものが、すなわち『精神現象学』における全体の流れからいえば実体が把握されないうえ、観察的把握の都度それは背後から否定されざるを得ない。観察によ

り得られる内容の実体による否定が観察的理性にとっては地の脅威として理解されるのである。それ故地の脅威ということでもって、観察的理性の立場そのものが必然性をもたない偶然なものにすぎないことが示されているのである。<sup>註32</sup> 意識は自然の研究において自然そのものでなく常に意識自らの考え、知見従って自己自らに出会うだけなのである。<sup>註33</sup> だからしてあらゆる自然研究の自然的意味はすべて廃棄されることになるということを、観察的理性についての叙述はその背後において示している。またたとえ頭蓋論において意識がその観察の始めにおいて意図していたような自然そのものを考察の対象とするにしても、それを意識することができず、結果的にはそれを自覚的存在としての精神と直接結合する無限判断へと陥ることになる。従って観察という意識の形態にあつては、意識は外的な客観的存在を認識できないというのがここでヘーゲルの一貫した主張である。意識は疎外に陥るか、<sup>註34</sup> さもなければ全く相反する二つのものを直接結びつける無限判断に陥るかのいずれかであると考えられている。

観察的理性の叙述においてしばしば述べられている内と外の対立、「外なるものは内なるものの表現である」<sup>註35</sup> などの当時の自然科学の主張は、ヘーゲルの立場からすれば全く批判に耐ええない機械論にすぎなかったであろう。それを概念的認識の一段階として克服し、位置づけた点に、ヘーゲルの功績を認めることができよう。しかしその一方で我々はまた今日の自然科学を念頭に置くと、科学的精神をヘーゲルの如く絶対知への意識の道程の一段階としてのみ理解するのではなく、そのうちにそ

れを超えた積極的意義も充分見出すことができるのも事実である。確かにヘーゲルの意図したものは概念的必然性ということでもって伝統的な実体観を克服することであった。「真なるものを単に実体としてのみでなく、主体 (Subjekt) として把握すること」<sup>註37</sup> 実体 || 主体説にたつて自然をも精神の外化として、専ら精神の運動のもとに把握するのが彼の哲学の目指すところであった。そのようなヘーゲルの目から見ると、近代自然科学は外なる物に向いながら、結局は自分をしか見出せないのであり、そこに限界を見ている。それ故その点においては近代自然科学の一面、限界が正確に把握されているといえよう。しかし実体 || 主体説が精神の世界に対してと全く同じように自然科学的意識、自然そのものに適用されるとき、そこにまた無理が生じてくるのも事実であろう。それ故自然の領域については精神の領域に対してと違い、実体 || 主体説を適用するにしても、それはむしろ運動観の確立を始めて始めてなされるべきではなからうか。この点については今後の研究課題としたい。

註1 Hegel : *Phänomenologie des Geistes*. Hr. von J. Hoffmeister  
S. 178 以下同書は *Phä.* で略記

註2 *Phä.* S. 86

註3 *Ibid.* S. 252

註4 *Ibid.* S. 253

註5 G. Lukács : *Der junge Hegel*. の第四章の主観的精神において

註6 *Phä.* S. 252



- 註 7 ibid. S. 133
- 註 8 ibid. S. 133
- 註 9 Hegel : Philosophische Propädeutik . Hg. von Glockner S. 112
- 註 10 ibid. S. 112 f.
- 註 11 ibid. S. 112
- 註 12 Pha. S. 71
- 註 13 拙論『精神現象学』「観察的理性の運動」(修士論文)を参照された。
- 註 14 G. Lukács : Der jungel Hegel S. 540
- 註 15 Pha. S. 255
- 註 16 拙論『精神現象学』における無限判断と推理について(広島哲学第25集)を参照された。
- 註 17 Pha. S. 253
- 註 18 ibid. S. 236
- 註 19 ibid. S. 57
- 註 20 ibid. S. 183 カッコ内は筆者註
- 註 21 船山信一『ヘーゲル哲学体系の生成と構造』S. 59 f.
- 註 22 前掲(註16)の拙論を参照されたい。
- 註 23 Pha. S. 551
- 註 24 T. L. Haering : Hegel, sein Wollen und sein Werk. S. 497 f.
- 註 25 榎山欽四郎『ヘーゲル精神現象学の研究』S. 13 ff.
- 註 26 G. Lukács : Der junge Hegel. の第四章の主観的精神を参照された。
- 註 27 Pha. S. 220

- 註 28 ibid. S. 185 ff.
- 註 29 ibid. S. 192
- 註 30 ibid. S. 193
- 註 31 ibid. S. 219
- 註 32 ヘーゲルは自然科学的意識は偶然的立場に立っているにもかかわらず、偶然と必然とを分けることにより、自らの必然を主張していると考えている。
- 註 33 Pha. S. 220 におおづヘーゲルは "so hat das beobachtende Bewußtsein nur das Meinen als Ding von sich." とおつていふ。
- 註 34 自然科学的意識が物において把えたものが、物ではないという意味におおづ。
- 註 35 Pha. S. 199
- 註 36 広義には自然科学的機械観に対し、目的観と考えることができる。
- 註 37 Pha. S. 19